The International Journal of Tourism Science

Vol.14 March 2021

Tokyo Metropolitan University
Graduate School of Urban Environmental Sciences
Department of Tourism Science

Commemorative issue for Prof. Kikuchi's retirement
[Special Articles]

An Exhortation toward Regional Geography of Tourism
Toshio Kikuchi

A consideration on the conditions for tourism development in mountain villages
Toshiaki Nishino

A discussion on the characteristics of mountain tourism in Japan
Masaaki Kureha

Changes in tourism along the Baltic Sea coast in Germany: from the example of Warnemünde
Carolin Funck

Review of wildlife tourism's contribution to wildlife conservation in Sri Lanka and challenges caused by COVID-19 pandemic
Ranaweerage Eranga

Discovery of local resources through regional surveys
Ryuta Saitoh

The sightseeing destination created by coproduction: Kogesawa plum-grove in Takao Baigo, Hachioji city
Kasane Shirayanagi

Analysis of Inter-Destination Cycle Tourist Movement Using GIS
Keita Nishimura

[Research Articles]

The Development for the Branding of Agricultural Products with the Collaboration between Urban Farmers, Restaurants, and Delivery Business
- A Case Study of "Kokuvege" Project in Kokubunji City, Tokyo -
Ryosuke Koda, Susumu Kawahara

Memorable Tourism Experience -The influence of tour guides and spontaneity -
Ayuna Igarashi, Taketo Naoi

The Restructuring and Expansion of Locality through Development of Beer Tourism in the Arrondissement of Dunkirk, France
Ryo Iizuka, Taiyo Yagasaki, Toshio Kikuchi

Climate Change Mitigation Measures in Aviation Sector and Implication for Tourism Sector
Katsuya Hihara

Possibility of Narita Airport Transit & Stay Program for Inbound Tourism Promotion to Japan
Yukiko Katagiri, Taichi Suzuki, Tetuso Shimizu

The Possibility of Tourism that Utilized Beauty Experience Based on the Changes of Relationship Between Cosmetic Museum and its Visitors
Norie Hirata, Ricaco Furuya, Susumu Kawahara

[Research Notes]

Tourism Development of Coastal Resorts in Cairns, Australia: A Case of Palm Cove
Kei Ota, Taiyo Yagasaki

The Characteristic of Scattered Hotel from the Perspective of Business Evolution in Redesigning Vacant Houses
Haruka Sekiya, Yu Okamura

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
東京都立大学

観光科学研究　第十四号　二〇二一年　三月
東京都立大学　大学院　都市環境科学研究科　観光科学域

ISSN 1882-4498

観光科学研究

第14号 2021年 3 月

東京都立大学 大学院
都市環境科学研究科
観光科学域

菊地俊夫教授退職記念号

第一部　特集論文

観光地誌学のすすめ
菊地俊夫

山村における観光振興の成立条件に関する一考察
西野寿章

日本における山岳ツーリズムの特性に関する一考察
呉羽正昭

ドイツバルト海沿岸の観光変動：ヴァルネミュンデ保養地の事例から
フンク・カロリン

Review of wildlife tourism's contribution to wildlife conservation in Sri Lanka and challenges caused by COVID-19 pandemic
Ranaweerage Eranga

地域調査を通した地域資源の発掘
齋藤竜太

市民と行政の協働でつくる観光地　―八王子市高尾梅郷木下沢梅林―
白柳かさね

GIS を用いたサイクリストに関する観光行動の分析方法
西村圭太

第二部　一般論文

［論説］

農家と飲食店，流通事業者の連携による農産物ブランディングの展開　―国分寺市「こくベジ」プロジェクトを事例として―
甲田亮輔・川原晋

思い出に残る観光経験　―ガイドの有無と自発性による影響―
五十嵐鮎夏・直井岳人

ビールツーリズムを通じたロカリティの再編と広域化　―フランス・ノール県ダンケルク郡を事例に―
飯塚遼・矢ケ﨑太洋・菊地俊夫

航空分野における気候変動対策と観光分野への示唆
日原勝也

訪日インバウンドプロモーションとしての成田空港トランジット＆ステイプログラムの活用可能性
片桐由希子・鈴木太一・清水哲夫

化粧品会社の企業博物館と来館者の関係からみる美容体験コンテンツの観光活用可能性
平田徳恵・古谷梨伽子・川原晋

［研究ノート］

オーストラリア・ケアンズにおける海岸リゾートの発展　ケアンズ近郊パームコーブの事例
太田慧・矢ケ﨑太洋

空き家活用の事業展開の視点から見た分散型ホテル事業の特徴
関谷悠・岡村祐

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
東京都立大学

目　次

本号は，東京都立大学　観光科学教室（学部　観光科学科，大学院　観光科学域）の前身である，都市環境科学研究科内の観光科学専修の発足（2007 年 4 月）に尽力された当初からのメンバーである，菊地俊夫教授の退職記念号として編纂した。第一部は特集論文として，菊地俊夫教授および，ゆかりのある地理学分野の諸先生方，および菊地研究室の卒業生からの寄稿論文で構成した。第二部は，通常通りの観光科学教室の教員および学生の執筆による一般論文としている。

菊地俊夫教授退職記念号

第一部　特集論文

観光地誌学のすすめ
　菊地俊夫 …… 9

山村における観光振興の成立条件に関する一考察
　西野寿章 …… 17

日本における山岳ツーリズムの特性に関する一考察
　呉羽正昭 …… 23

ドイツバルト海沿岸の観光変動：ヴァルネミュンデ保養地の事例から
　フンク・カロリン …… 31

Review of wildlife tourism's contribution to wildlife conservation in Sri Lanka and challenges caused by COVID-19 pandemic
　Ranaweerage Eranga …… 37

地域調査を通した地域資源の発掘
　齋藤竜太 …… 43

市民と行政の協働でつくる観光地　―八王子市高尾梅郷木下沢梅林―
　白柳かさね …… 51

GIS を用いたサイクリストに関する観光行動の分析方法
　西村圭太 …… 59

第二部　一般論文

［論説］

農家と飲食店，流通事業者の連携による農産物ブランディングの展開
―国分寺市「こくベジ」プロジェクトを事例として―
　甲田亮輔・川原晋 …… 67

思い出に残る観光経験　―ガイドの有無と自発性による影響―
　五十嵐鮎夏・直井岳人 …… 77

ビールツーリズムを通じたロカリティの再編と広域化　―フランス・ノール県ダンケルク郡を事例に―
　飯塚遼・矢ケ﨑太洋・菊地俊夫 …… 87

航空分野における気候変動対策と観光分野への示唆
　日原勝也 …… 97

訪日インバウンドプロモーションとしての成田空港トランジット＆ステイプログラムの活用可能性
　片桐由希子・鈴木太一・清水哲夫 …… 107

化粧品会社の企業博物館と来館者の関係からみる美容体験コンテンツの観光活用可能性
　平田徳恵・古谷梨伽子・川原晋 …… 117

［研究ノート］

オーストラリア・ケアンズにおける海岸リゾートの発展　ケアンズ近郊パームコーブの事例
　太田慧・矢ケ﨑太洋 …… 127

空き家活用の事業展開の視点から見た分散型ホテル事業の特徴
　関谷悠・岡村祐 …… 135

CONTENTS

Commemorative issue for Prof. Kikuchi's retirement
[Special Articles]

An Exhortation toward Regional Geography of Tourism
Toshio Kikuchi 9

A consideration on the conditions for tourism development in mountain villages
Toshiaki Nishino 17

A discussion on the characteristics of mountain tourism in Japan
Masaaki Kureha 23

Changes in tourism along the Baltic Sea coast in Germany: from the example of Warnemünde
Carolin Funck 31

Review of wildlife tourism's contribution to wildlife conservation in Sri Lanka and challenges caused by COVID-19 pandemic
Ranaweerage Eranga 37

Discovery of local resources through regional surveys
Ryuta Saitoh 43

The sightseeing destination created by coproduction: Kogesawa plum-grove in Takao Baigo, Hachioji city
Kasane Shirayanagi 51

Analysis of Inter-Destination Cycle Tourist Movement Using GIS
Keita Nishimura 59

[Research Articles]

The Development for the Branding of Agricultural Products with the Collaboration between Urban Farmers, Restaurants, and Delivery Business - A Case Study of "Kokuvege" Project in Kokubunji City, Tokyo -
Ryosuke Koda, Susumu Kawahara 67

Memorable Tourism Experience -The influence of tour guides and spontaneity -
Ayuna Igarashi, Taketo Naoi 77

The Restructuring and Expansion of Locality through Development of Beer Tourism in the Arrondissement of Dunkirk, France
Ryo Iizuka, Taiyo Yagasaki, Toshio Kikuchi 87

Climate Change Mitigation Measures in Aviation Sector and Implication for Tourism Sector
Katsuya Hihara 97

Possibility of Narita Airport Transit & Stay Program for Inbound Tourism Promotion to Japan
Yukiko Katagiri, Taichi Suzuki, Tetuso Shimizu 107

The Possibility of Tourism that Utilized Beauty Experience Based on the Changes of Relationship Between Cosmetic Museum and its Visitors
Norie Hirata, Ricaco Furuya, Susumu Kawahara 117

[Research Notes]

Tourism Development of Coastal Resorts in Cairns, Australia: A Case of Palm Cove
Kei Ota, Taiyo Yagasaki 127

The Characteristic of Scattered Hotel from the Perspective of Business Evolution in Redesigning Vacant Houses
Haruka Sekiya, Yu Okamura 135

「観光科学研究」投稿規定

Ⅰ．投稿の資格

本誌への投稿は，首都大学東京の教員，院生や研究生を含む学生を基本とする。教員については非常勤や首都大学東京での勤務経験者（OB）を含む。連名による投稿の場合も最低一名，上記の関係者を含むことが望ましい。

観光科学に関連性があり，学術的な価値を有するものであれば，外部からの投稿も可能とする。

学生が主著者として論文を執筆する場合には，指導教員に学術論文としての体裁が整っていることを確認されたものであることを投稿の条件とする。

Ⅱ．原稿の種類

原稿の種類は，論説，展望，研究ノート，討論，報告，その他とする。

- 論説は，オリジナルな学術研究の成果で，関連学会あるいはその他の研究集会において討議を経たものを原則とし，他の学術雑誌に報告されていないものとする。
- 展望は，ある主題に関する研究成果を分析・検討し，研究の流れ・現状・展望などについて著者の見解を付したものとする。
- 研究ノートは，オリジナルな学術研究の中間報告や新しいデータ・資料などとする。
- 討論は，特定の研究テーマにおける専門的な意見交換や相互討論とする。
- 報告は，特色のある調査・計画・事業等の報告，あるいは，演習・実習・巡検等の報告とし，観光科学に関する新たな知見を含むと認められるものとする。
- その他，書評，各種ソフトの紹介，地域の情報，研究発表要旨など関連する分野の研究・教育に関する情報や意見については，随時「観光科学研究」編集委員会（以降，編集委員会）の判断で掲載の可否を検討する。

Ⅲ．原稿の分量

図表を含む基準ページ数は，執筆要項に定めるフォーマットを用いた状態で，全て 10 以内とする。超過は原則として認めないが，内容上やむを得ない場合に限り，投稿者の申し出によって認める場合がある。この場合は，超過分の必要経費の支払いを求める場合がある。

Ⅳ．投稿の期限

例年 3 月を発行月とし，投稿の締切は発行月の前年 10 月 31 日とする。編集委員会から依頼した原稿の締切は 1 月 10 日とする。

Ⅴ．投稿方法

別途に定める「観光科学研究執筆要項」の定めるところによる。

Ⅵ．「観光科学研究」編集委員会

編集委員会は，首都大学東京都市環境学部観光科学科の専任・併任の教員で構成し，委員長および委員は，同学科教員会議において決定する。

論文の匿名査読者は，編集委員会のなかに設置される査読委員会が依頼する当該論文の審査に適任の学内外の研究者とする。

その他，編集委員会に必要な事項については，別途定めるものとする。

Ⅶ．論文等の採否

1）原稿は，本投稿規定および執筆要領に従って執筆するものとし，これらに準拠していない原稿は受付しないことがある。

2）論説，展望，研究ノート，討論は，上記査読委員会の審査による判定により，採否を決定する。判断基準は，以下のとおりとする。

①完成度：観光科学研究の学術論文として体裁が整っており，内容が簡潔，明瞭かつ容易に記述されていること。主に以下に示す事項により評価される。

a）論文題目の適切性

b）論文構成上のバランス

c）表現・用語，関連文献引用等の適切性

d）図表等の表現の適切性

②新規性：内容が既発表または既知のことから容易に導き得るものでないこと。たとえば，以下に示すような事項に該当する場合は新規性があると評価される。

a）研究の主題，内容，使用した概念，手法に独創性がある。

b）学界，社会に重要な問題を提起している。

c）現象の解明に貢献している。

③有用性：内容が観光科学分野の論文として価値があること。たとえば，以下に示すような事項に該当する場合は有用性があると評価される。

a）問題意識・課題設定が適切である。

b）応用性，発展性がある。

c）当該分野での体系化を図り，将来の展望を与えている。

④信頼性：内容に誤りがなく，論証に信用がおけるものであり，既住の研究との関係が明らかなこと。ただし，完成度や信頼度が以下に示すような事項に該当する場合や，萌芽的研究としての発展が期待できる論文は，その価値を評価する。

a）検証は十分とはいえないが，理論や定式化が学問の発展性に有用である。

b）文献調査は十分とはいえないが，着眼点に新規性があり，研究の位置付けは明確である。

⑤適時性・先駆性：取り上げる内容が，一般には知られていない観光科学研究上の新たな知見を含み，時宜を得たテーマであること。

3）なお，下表に示すとおり，原稿の種類によって重視する判断基準は異なる。

	論説	展望	研究ノート	討論
①完成度（共通基準）	○	○	○	○
②新規性	○		○	
③有用性	○	○		○
④信頼性	○	○		○
⑤適時性・先駆性			○	○

4）報告及びその他の原稿に関しては，編集委員会による形式的なチェックのみ行い，採否を決定する。

5）内容の訂正などを指摘された原稿については指定された締切までに改訂原稿が投稿されない場合，審査を終了する。

6）内容の訂正に際して，著者は修正要求・修正希望に指摘された事項に適切に対応するものとするが，　指摘の範囲以外の修正をすることは原則としてできない。

7）審査の結果が「不採用」の場合で，その不採用理由に対して，論文の著者が明らかに不当と考えた場合は，その理由を明記した文章を作成し，不採用通知より 4 週間以内に編集委員宛に異議を申し立てすることができる。

Ⅷ．付則

この規定の変更は，「観光科学研究」編集委員会からの提案を受けて，観光科学科教員会議の議を経ておこなう。その他必要な事項は，「観光科学研究」編集委員会において決定する。

この規定は，2007 年 9 月 3 日に制定，施行する。

（2013 年 10 月 25 日，2014 年 01 月 09 日，2018 年 05 月 19 日，2019 年 05 月 10 日一部修正）

「観光科学研究」執筆要領

Ⅰ．原稿の基本様式

原稿は，原則として「観光科学研究」編集委員会が提供するテンプレートをダウンロードしたうえで，第一次原稿はWord形式で，最終原稿（採用となった原稿）はPDF形式で提出すること。

投稿原稿は日本語または英語とする。英語を母国語としない投稿者が英語で投稿する場合は，事前にネイティブチェックを受けることを強く推奨する。校閲者の能力不足が原因で，編集委員会が独自に英文の校正を委託した場合は，その実費を投稿者に求める。

テンプレート使用及びファイル形式の指定の目的は，第一にフォーマットの統一および分量の正確な把握であり，第二は事務局および印刷所との原稿受け渡しの迅速化にある。

Ⅱ．投稿方法

原稿は電子メールに添付して当該年度の編集委員長宛に送信するか，適切なメディアに記録して郵送する。受理された原稿は返却しない。ただし，図表などは求めがあれば返却に応じる。

なお，投稿の際は，必ず投稿原稿の種別を明示すること（論説，展望，研究ノート，フォーラム，書評，研究，発表要旨，その他）。

郵送での提出先：

〒192-0397　東京都八王子市南大沢 1-1
首都大学東京 都市環境学部 観光科学科
「観光科学研究」編集委員会 宛

Ⅲ．執筆上の留意点

1) 原稿は多くの人々に読まれ，理解されやすいように書く。
2) 簡潔に記述し，読者が内容の大すじを見失うことのないように書く。
3) 読者に結論とその利用法をはっきりつかませることができるように書く。
4) 他の文献等から引用を行う場合には，著作権に触れることのないように十分留意するとともに，必ずその出典を明らかにする。

Ⅳ．執筆方法

4.1 文章

1) 原稿は，横24文字，縦45行の2段組とする。数字およびローマ字は半角扱いとする。見出し前後のスペースの取り方はテンプレートに準拠する。項目ごとのポイント数およびフォントも同じ。
2) ヘッダーやフッターにページ数をつけない。
3) 簡潔平明な理解しやすいひらがなまじりの口語体とする。章立ては原則として次の例に準拠し，本文中で触れる場合は「1では」，「2.1(2)において」のように言及すること。

章　Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．Ⅳ．・・・・・
項　1.1　1.2　1.3　1.4・・・・・
目　(1)　(2)　(3)　(4)・・・・・

4.2 用字，用語

文章は，常用漢字と現代かなづかいを用いる。やむをえず常用漢字以外の漢字を用いる場合は，その後ろに括弧付きで読み方を標記すること。また，数字はアラビア数字（数量を表すとき）を用いる。

年号は原則として西暦を用いる。元号の表記が必要な場合は，「1972年（昭和47年）の生まれである」のように，西暦の後ろへ併記する。

ローマ字，ギリシャ文字，イタリック体文字はその区別を明確にする。

本文，図・表とも句読点は，「,」(カンマ)，「。」（丸）に統一する。

4.3 数式

数式は重要なものだけを示す。詳細な説明が必要な時には付録に示す。例えば，

(8pt・半行程度のスペース)

$$A \times x + b = c \qquad (1)$$

(8pt・半行程度のスペース)

のように記述する。できるだけWordのオブジェクト中に準備されている数式エディタを用いる。文章の中に数式が入る時は，誤解のないよう注意し

て 1 行で書く。

4.4 図・表

1) 図・表の数はできるだけ少なくし，重要でないものは省く。図と表とが同一内容の時には，どちらか一方にする。
2) 複写したものは避ける。必要な場合は，掲載前に現著作権者へ転載の許可を取っておくこと。
3) 図の目盛線，表の罫線の間隔は，見やすくなるように設定する。
4) 図・表・写真は原稿中に貼付して提出する。刷上りの大きさを考慮し，図・表中の文字，記号については縮小後でも判別できる大きさで記入する。なお，不明確な図・表や大きな図・表については，編集委員会から修正を求められることがある。
5) 図や写真は白黒を基本とするが，編集委員会が論文内容の表現上，必要と見なした場合は，カラー図の掲載も許可されることがある。許可されない図表のカラー印刷を希望する場合は，別途実費の支払いを求める場合がある。
6) 図（写真）・表のキャプションは以下のようにし，図の場合は図の下側，表の場合は表の上側に置く。

図 1 ○○○○○ / 表 2 □□□□□

図1 ラスタ演算による日米ツーリズム空間の差分解析結果

4.5 摘要

内容を端的に要約した日本語のアブストラクトを 800 字以内で論文の巻頭に，また英語のアブストラクトを 200words 以内で巻末に添付する。

Ⅴ．文献の引用・注記のしかた

1) 参考文献は本文の末尾にまとめて記載する。
2) 注記を入れる場合は，本文中の引用箇所の右肩に，小括弧を付した注記番号を文献の番号を記入する（例：文献 1)を参照)。そして，本文と文献リストの間に，注をまとめて挿入すること。
3) 本文中で文献を引用する際は，次のように表記する。

（例 1）ブリティッシュコロンビア州における自然公園の保護政策については，Dearden and Rollins（2002） に整理されている。

（例 2）Downs は，未就学児童に対する読図および経路探索実験から，子どもの地図化能力は生得的なものではないとの主張を展開した（Downs et al. 1988, p.123; 若林・鈴木 2005, pp.456-789)。

4) 文献目録の記載例

【雑誌】

（例 1）東京太郎・大阪次郎 1997. 太郎と次郎の将来展望. 観光三郎研究 18(3): 140-144.

（例 2）Cornelius, C., Navarrete, S.A. and Marquet, P.A. 2001. Effects of human activity on the structure of coastal marine bird assemblages in Central Chile. Conservation Biology 15 (5): 1396-1404.

【単行本】

（例 1）岡本伸之 2001.「観光学入門: ポスト・マス・ツーリズムの観光学」. 東京: 有斐閣.

（例 2）Cerny, T.B. 1993. Renewable Energy. Island Press.

注

1) 著者数が多い場合は，本文中においては‘ほか何名’，‘et al.’を付して筆頭者名のみとする。ただし，参考文献欄においては，原則として全著者の名前を記載すること。
2) 雑誌名の略記は，各分野において一般的なものを用いる。
3) 文章を直接引用する場合は，「」でその文章を挟み，最後に引用した頁の始まり頁と終わり頁

を明示する「このように記すこと」(pp.100-111)。直接引用をしない場合は，著者名と出版年のみ記す（観光太郎 1987)。

4) 一般的でない文献については詳しく記入する。

参考文献は以下のような書式に統一し，文末に並べる。謝辞を加える場合は，本文が終わったあとに「謝辞」の項目を設け，そこに挿入する。

参考文献

早崎正城 2002. 観光学における史的一考察. 長崎国際大学論叢 2:111-118.

竹内謙彰 1998.「空間認知の発達，個人，性差と環境要因」.東京: 風間書房.

中村哲.観光におけるマスメディアの影響. 前田勇（編著） 2007.「21 世紀の観光学: 展望と課題」: 83-100.

Nash,R. 2006. Causal network methodology: tourism research applications. Annals of Tourism Research 33(4): 335-349.

Daimon, T., Nishimura, M. and Kawashima, H. 2000. Study of drivers' behavioral characteristics for designing interfaces of in-vehicle navigation systems based on national and regional factors. Japanese Society of Automotive Engineers Review 21: 379-384.

Downs, R.M. and Liben, L.S. 1992. Children's inderstanding of maps. In P. Ellen and C. Thinus-Blanc (eds.) 1987. Cognitive processes and spatial cognition in animal and man: vol.2 neurophysiology and developmental aspects. Martinus Nijhoff Publishers: 202-219.

Impacts of Tourism on Marine Wildlife; http://www.gse.mq.edu.au/Research/mmrg/Tourism.htm. (アクセス日 2007.5.25)

Ⅵ. その他

連絡先に電子メールのアドレスを記入するか否かは，著者に一任する。

最終原稿の pdf ファイルを執筆者に提供するとともに，希望者には実費にて別刷りを配布する。

Ⅶ. 付則

この規定の変更は,「観光科学研究」編集委員会からの提案を受けて，観光科学科教員会議の議を経ておこなう。

その他必要な事項は,「観光科学研究」編集委員会において決定する。

この規定は,2007 年 9 月 3 日に制定,施行する。

付録

付表 1 各項目のポイント数

項目	ポイント数
表題（和文）	16
表題（英文）	14
著者名（和文）	12
著者名（英文）	9
脚注の著者連絡先	9
章のタイトル	11
アブストラクト	10
本文	10
参考文献	9
注	9
謝辞	9

なお，表中の文字のポイント数は特に指定しない。フォントについては，付表 2 のフォントを使用する。なお，英数字と括弧は原則として半角とするが，章番号だけは全角とする。

付表 2 Windows と Macintosh のフォントの対応

	Windows	Macintosh
明朝体	MS 明朝	細明朝体または MS 明朝
ゴシック体	MS ゴシック	中ゴシック体または MS ゴシック
Times	Times New Roman	Times
Arial	Arial	Arial
Symbol	Symbol	Symbol

(2008 年 2 月 2 日，2011 年 2 月 12 日，2013 年 2 月 18 日，2013 年 10 月 25 日,2014 年 01 月 09 日,2018 年 05 月 19 日一部修正,,2020 年 01 月 09 日一部修正)

「観光科学研究第14号」編集委員会

◎　川原 晋
菊地 俊夫
清水 哲夫
沼田 真也
岡村 祐
倉田 陽平
直井 岳人
日原 勝也
大澤 剛士
Wu Lingling
高木 悦郎
野田 満
小笠原 悠
大平 悠季
○　矢ケ﨑 太洋
阿曽 真紀子
平田 徳恵
Khanal Bishnu Prasad
（◎委員長　○担当幹事・特集論文企画）

2021 年 3 月 15 日　印刷
2021 年 3 月 15 日　発行

観光科学研究　第14号
（菊地俊夫教授退職記念号）

編集兼発行　東京都立大学 大学院 都市環境科学研究科 観光科学域
〒192-0364　東京都八王子市南大沢 1－1　9 号館
TEL　042-677-2665

印刷　株式会社　相模プリント
〒252-0144　神奈川県相模原市緑区東橋本 1-14-17
TEL　042-772-1275

古紙配合率70%再生紙を使用しています